

八尾歴史物語

三十卷

続・河内名所図会を訪ねて②

（なまのお）
玉祖神社と豊臣秀頼

豊臣秀吉が大坂城築城のため
に整備した「十三街道」の由来
となった「十三峠」。その峠を下つ
た先にある本市の神立には、奈
良時代を始まりとする「玉祖神
社」があります。平安時代の木
造男女神像（府指定文化財）や
鎌倉時代の北条時政制札（国重
要文化財）など数多くの文化財
を残す、歴史ある神社です。

玉祖神社の長い歴史の中、戦
国時代に荒廃していた神社の再
興を果たしたのが、秀吉の息子
である秀頼でした。現在も境内
には秀頼が本殿再興時の慶長9
年（1604年）に寄進したと
伝わる市内最古の石燈籠が残っ
ています。

秀頼による近畿地方を中心と
した神社再興は、大坂の陣開戦
の発端となった京都の方広寺が
有名ですが、秀頼の所領であつ
た摂津の四天王寺をはじめ、河
内や和泉の神社でも数多く行わ
れており、玉祖神社もその一つ
と考えられています。豊臣家の
豊かな資産を消耗させようとい

う徳川家康の意図もあつたよう
ですが、近年の研究では、秀頼
による領国支配の手段でもあつ
たことが指摘されています。

その後、慶長20年（1615年）
の大坂夏の陣では、十三街道を
境にして、徳川方の井伊直孝が
街道北側の「楽音寺」に、藤堂
高虎が南側の「千塚」に軍勢を
置きました。秀頼が再興した玉
祖神社の本殿は、この戦いの時
に撤去されてしまったようです。

『河内名所図会』の挿絵には玉
祖神社の境内の様子が描かれて
おり、大坂夏の陣以降、再興さ
れたことが分かります。現在の
本殿は江戸時代中ごろのものと
考えられており、極彩色の色彩
が残る立派な建築物です。



▲『河内名所図会』の玉祖神社の挿絵